

「難民鎖国」政府に厳しい目

改革望む声 議論かみ合わず

難民申請中でも本國へ強制送還できるよりにする改正入管難民法が九日、成立した。日本の難民認定の厳しさを入管組織の問題点を挙げて改革を求める声に、政府は「慎重な手続を経て、適切に対応している」と主張し、議論はかみ合わなかった。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は昨年、国外へ逃れた難民らの総数が初めて一億人を超えたと公表。「難民鎖国」の政府に向けられる視線は厳しさを増している。

死刑のボタン

「このまま法案を通すと、無罪の人に、間接的に死刑執行ボタンを押すことになる」と。難民の実情に詳しく、四月の衆院法務委員会に参考人として出席した一橋大大学院の橋本直子准教授は、こう警告した。改正法の柱は、難民申請中の強制送還を一律に停止する。送還停止効に關し、申請三回目以降は送還対象として制限した。現行法では日本で殺人など重大な罪を犯して服役した後、申請中なら送還できないとし、斎藤健法相は「喫緊の課題」と必要性を強調した。



高まる不信感

日本の難民受け入れは、一九八一年の難民条約加入に始まる。消極的な政府の姿勢に影響を与えたのが、〇〇二年、三歳の女児を含む脱北者一家五人が亡命のため中国・瀋陽の日本総領事館に逃げ込みながら、現地警察に拘束された問題だ。

出入国在留管理庁による強制送還を命じられても出国を拒む外国人は、昨年未帰国者四千二百三十三人。中には苛烈な迫害を体験し、母國に戻れば命の危険があると訴えながら難民申請が認められない人も少

改正入管法 成立

入管庁幹部は「本日に保障が必要ない外国人は救っている」とする。ただ、〇一二年の二十年間で難民認定率は年間平均一・一％未満だった。入管庁幹部は「本日に保障が必要ない外国人は救っている」とする。ただ、〇一二年の二十年間で難民認定率は年間平均一・一％未満だった。



改正入管法が成立し、国会で審議する人々。6月9日午後

海外と比べ極端に低く、説得力を欠く。国会審議では入管当局が特定の感情が高まっている。

人権への配慮が肝に

出入国管理に詳しい山脇康嗣弁護士の話。不法滞在者らの迅速な送還を目指す改正入管法の改正は、永住可能な熟練外国人労働者を増やす特定技能制度の見直しと同時に決まった。入り口と出口の仕組みを一体的に整備し、園にとつて「有益な人」は積極的に受け入れ、「有害となる恐れがある人」は出ていってもらうという形だ。国際的に見て特異ではないが、人権への配慮とのバランスが肝になる。日本の場合、難民審査の在り方に不透明な点があることは否めず、真に保護すべき人を守ることもできるのか、疑義が残っている。改正法施行までの間に、政府は国会審議などで指摘された問題点に真摯（しんしん）に向き合い、改善を進める必要がある。

異様な現状 国民不安

元国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐日代表の滝澤三郎氏の話。今回の改正は、今後増加が見込まれる難民や紛争避難民の受け入れ基盤をつくるもので、評価できる。先進国では難民排斥の動きが強まり、難民認定を希望しても申請すらさせない国もある。日本で創設する補完的保護の制度は「難民鎖国」と呼ばれるほど閉ざされてきた門戸を開くことにつながる。一方、送還意欲者の約三分の二に前科がある現状は異様だ。殺人などの重罪を犯しても、送還停止制度を利用して難民申請すれば送還されず、国民の不安感は拭えない。日本では地理的要因などから、申請者の中に認定すべき「真の難民」は少ない。入管当局は積極的に情報を公開し、こうした実情に理解を得る努力をすべきだ。

21年国会では廃案

二〇二二年の通常国会にも入管難民法改正案は提出されたが、名古屋出入国在留管理庁の施設でその年の三月、スリランカ人女性ウィシュマ・サンタマリさん（当時三三歳）が死亡した問題が影響し、廃案となった経緯がある。野党側は再発防止策が不十分だと追及し、今国会で問題は「再燃」。妹一人も廃案を求め続けてきた。

ウィシュマさん事件影響

姉の遺影を抱え、九日の参院本会議を傍聴した妹のワタナベさん（三三歳）とポーリン（二歳）は、討論から可決までの間、険しい表情で議場を見つめた。成立後「とても嬉しい。人間である以上他の人間を助けるべきで、政府にはその責任がある」と訴えた。ウィシュマさんは一七年に留學中の在留資格で来日。その後不法残留となり、収容された。二年一月中旬以降、嘔吐などの症状を訴え医師の診察を受けたものの、入院することなく亡くなった。

山本代表が「妨害」自民など懲罰動議 参院に提出

自民、立憲民主、公明、国民民主各党は九日、れいわ新選組の山本太郎代表が八日の参院法務委員会での入管難民法改正案が採決された際、もみ合いとなった議員にけがをさせたとして、参院に懲罰動議を提出した。懲罰委員会に付託されたら、二十一日までの国会会期中に正式決定する可能性がある。

提出に先立ち、山本氏は国会内で記者団に「不当だ」と反発した。山本氏が採決時に委員長席に向かつて数度にわたって飛びかかり、周りにいた議員二人を負傷させたという。参院の秩序を著しく乱すものとして断じて看過することはない」と批判した。